イエス様を信じない者

2011/10/22
西九州伝道所
佐々木正明

　つい最近、街で見慣れない車を目にしました。小さな車体を大きな看板で囲み、五十年前の選挙の宣伝カーだって、ここまではしなかっただろうという異様な格好だったのはまだしも、そこに大きな字で書かれた過激な言葉には、いささか驚いてしまいました。

「イエス・キリストを信じる者は天国へ、信じないものは地獄へ」

　そういえば東日本の各地では、黒地に黄色の文字で、その手の言葉が書きなぐられた看板をたくさん見たのを思い出しました。極端な福音主義的キリスト教に所属する人たちが、やっていることではないかと想像しますが、「すさまじいなぁー。そういう過激な言葉がキリストを信じるきっかけになる人も、いないではないのがこの世界だから」と、寛容な思いを抱く一方、「イヤーな気分」にもなったものです。子どものころ、フナなんぞをすくいに沼水に入ったのに、真っ赤な腹のぬるぬるイモリが手網に入ったときに感じた、あの忌々しい気持ちです。

Ｉ．主イエスを信じなければ救われないのか

　「主イエスを信じなさい。そうすればあなたもあなたの家族も救われます」（使徒 16 : 31）

　この言葉は聖書の言葉であり、そこに間違いはありません。だれでも、主イエスを信じれば救われるのです。では、主イエスを信じなければ、だれも救われないのでしょうか。「A イコール B、しかし B 必ずしも A ならず」です。つまりこの言葉は、主イエスを信じる者は救われると断言していますが、主イエスを信じなければ救われないとは、言っていないのです。

　ところが、主イエスを信じなければ救われないという主張は、聖書の他の言葉によっても裏付けられているかのように、教えられています。たとえば、使徒の働きの四章十二節

には次のように書かれています。「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も人間に与えられていないからです」　ここで「この方と」と言われているのはもちろん主イエスのことです。さらにテモテへの手紙第Ⅰ・二章五節には、「神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです」とも記されているからです。

この他にも、新約聖書にはイエス・キリストを信じることが救いの道であるということが、色々な表現で語られているのは良く知られているところです。それらすべてのことを認めた上で、ひとつ疑問があります。

では、信仰によって救われたと言われるアブラハムは、イエス・キリストを信じたのでしょうか。

Ｉ．Ａ．　主イエスを信じることがなかったアブラハム

アブラハムは、主イエスが生まれる二千年ほども前に生きた人です。もちろん、主イエスのことは何一つ知りませんでした。ですから、彼は主イエスを信じていなかったのです。でも、確かに救われました。この議論を延長すると、旧約時代の神の人たちは、みな、主イエスを信じないでも救われたのです。突き詰めて言うと、キリストが生きておられたときに生きていたイスラエル人の中にも、キリストを知らなかった人たちがいたことでしょう。キリストが十字架に架かり、さらに死から甦られた後にでさえ、キリストを知らないまま神の前に忠実に歩んでいたユダヤ人も、いたかもしれません。その人たちは、キリストを信じることなく救われたはずです。

新約聖書を読むと、アブラハムが信仰によって救われたという事実は、異邦人への福音、あるいは普遍的福音という神学の基盤であることがわかります。私たちはみな、ユダヤ人も異邦人も同じ信仰によって救われると教えられています。たしかに、「行いによらない」という点では同じ信仰です。ところが信じる相手、対象が異なります。アブラハムは「神」を信じたのです。ところがパウロやペテロは、主イエスを信じる信仰を語っているのです。パウロはアブラハムの神に対する信仰を、何の躊躇もなしに、主イエスへの信仰にすり替えています。

「主イエスを信じなさい」というメッセージは、「我々はアブラハムの子であって、みな天地を創造された神を信じている」という、ユダヤ人に対して語られるとき、明確で、強

烈なインパクトがありました。ナザレのイエスこそ主であるという事実は、様々な奇跡としるしによって確証されましたが、何よりも、甦りという決定的事実によって、さらに明確にされたのです。ですから、主イエスと甦りは一つのセットとして語られたのです。

「主イエスを信じなさい」というメッセージは、主イエスの甦りを目の当たりにした初代のクリスチャンたちには、黙っていることができない激烈な福音であり、一般のユダヤ人にとっても、まさに信じないではおれない強烈な福音でした。当時のクリスチャンたちはそのニュースを、異邦人に対しても、非常な情熱を傾けて語らないではおれなかったのです。

とはいえ、完全な異邦人たちに対しては、主イエスに話の焦点を持っていく前に、予備知識とも言うべきものが必要でした。パウロの伝道で言えば、ユダヤ人の会堂には来ることがない異邦人、つまりユダヤ人になりかけている異邦人ではなく、巷の異邦人に向かって語るときには、アテネでのパウロの説教の例が示しているように、最初から主イエスの話を持ち出すのではなく、まず、「天地創造の神」についての理解を得ようと務めています。少なくても、その程度の対応は見せているわけです。「神」についてまったく知らないままで、主イエスについて理解することはおおよそ不可能であり、たとえ僅かであったとしても、主イエスについての情報を理解することがないままでは、主イエスを信じることは出来ないからです。

幸か不幸か、パウロが宣教の相手としていたのは、異邦人とはいえ、ほとんどユダヤ人化した異邦人、あるいはユダヤ人の宗教に対してかなり好意的であり、天地創造の神について相当の知識を持っていた異邦人でした。そのために、多くの場合、「主イエスを信じなさい」でも通用したのです。ところが、完全な異邦人を対象とした場合は、「天地をお造りになった神」から、話を始めなければならなかったのです。

それでも、自らユダヤ人としてまたパリサイ派の学徒として、救い主を待ち望んでいたパウロにとって、キリストの出現と、死と復活によってもたらされた衝撃は、あまりにも凄まじいものでした。そのために、どのような状況にあっても、すぐさま、キリストについて語り出さないではおれなかったのだと思われます。

実際、アテネでのパウロの説教を読むと、異邦人に対してキリストの死と甦りを持ち出すのが早すぎた、あるいは唐突過ぎたと思われます。「超」西欧神学かぶれの福音派の牧師たちに言わせると、つまり、筆者の親愛なる仲間たちに言わせると、「アテネでのパウロは、ギリシヤ哲学などを引っ張り出して、キリストの福音を真っ直ぐに語らなかったから、救われる者が少なかった。あれはパウロの伝道の失敗例だ」となるのですが、事実はまった

く正反対だったと考えるべきです。

パウロは聞く者たちが完全な異邦人であるという条件を考慮して、見事に説教の仕方を変えたのです。だから、まったくの異邦人の中での最初の説教なのに、たとえ数人でも救われる者が起こっているのです。これは驚くべきことです。とは言え、このときの異邦人に対するパウロの対応は、まだ不充分であったと言わねばなりません。パウロは、完全な異邦人の聴衆には、まだ慣れていなかったのです。パウロは異邦人への使徒ではありましたが、彼のものの考え方、見方、あるいは神学的ロジックは、まだ、ユダヤ人そのものだったのです。

それでも啓示によって教えられたパウロは、すでに、「イエス・キリストを知らなかったアブラハム」の「神への信仰」を、キリストへの信仰と同じもの、同質のものとして理解していました。アブラハムがキリストを知らないまま、天地創造の神への信仰で救われたことを知っていて、天地創造の神への信仰を何の躊躇もなしに、キリストへの信仰と同じものだと理解することが出来たのです。

したがって、アテネにおいてのパウロは、キリストの話を持ち出さず、神への信仰だけを語っても良かったはずです。偶像の神ではなく、天地創造の神を信じる信仰を語り、その神の人間に対するみ心と愛と恵を語り、神が準備した救いを語り、その手段としての贖いを語ってから、贖いのために神から遣わされた主イエスを語ることが出来たはずです。いっぺんにキリストの甦りに話を持っていくことは、性急過ぎたといわざるを得ません。

あるいは、実際、パウロはそのようにゆっくり時間をかけ、手順を踏んでキリストの復活に話を持っていったのかも知れません。この出来事を記したルカが、出来事を要約して記録に残したとき、その部分を省いてしまったのかも知れません。そのほうが、ありそうなことです。いずれにせよ、主イエスの復活は、当時の使徒たちのメッセージの中心部分だったのです。

Ｉ．Ｂ．　日本人は、主イエスを信じないでは救われないのか

いま私たちが伝道の対象としている日本人は、パウロが伝道の対象としていた異邦人たちよりも、はるかにユダヤ文化からかけ離れた、「異邦人」です。日本には、パウロの異邦人伝道の拠点にあったような、ユダヤ人の会堂はありませんし、ユダヤ教への改宗者も、ユダヤ教の神を信奉している人もいません。

「日本人という異邦人」に伝道していると、パウロの異邦人の神学も異邦人への伝道の実践も、まだまだは始まったばかり、やっと発芽しただけ、よちよち歩きの状態に過ぎないと思わざるを得ません。とはいえパウロは、普遍的福音の理解のために、確固たる基盤を据えたのです。私たちは、パウロが啓示によって基盤を据えた異邦人への神学を、その啓示の書である聖書に立って発展させていかねばなりません。パウロが開いた異邦人伝道の道を、もっとしっかりと整えて行かなければならないのです。それが私たちに課せられている義務です。パウロがやっていたままでは不充分です。

それだけではなく、非常に長い年月にわたって「キリスト教国」であったために、自分たちが異邦人であるという意識も希薄になっていた、西欧人の神学をそのまま受け入れ、彼らの「インド人伝道」の神学を、そのまま実践している現状では、正しい福音伝道はできないのです。(「インド人」というのは、当時（十六世紀）のヨーロッパと地中海沿岸以外に住む、非キリスト教徒という意味です。ヨーロッパには東インド会社、あるいは西インド会社というのが幾つもありましたが、東側の非キリスト教徒と交易をする会社、あるいは西側の非キリスト教徒と渡り合う会社という意味です。インドはその代表ですが、東南アジアの国々はすべてインドであり、インドネシアという国名でも残っています。アメリカの先住民がアメリカン・インディアンと呼ばれるのも、ヨーロッパからみると西側に住む非キリスト教徒だからであり、インディオも同じ意味です。)

アブラハムはキリストよりも早く生まれたという、時代の差のために、キリストを知らないままでも救われました。それは、キリストが存在しなくても救われたと言う意味ではありません。アブラハムもキリストによる救いを受けたのです。キリストについての知識は、救われる側のアブラハムにはありませんでしたが、救う神の側には明らかな事実としてあったからです。そして神を信じたアブラハムは、その事実のゆえに、救われたのです。

現在の日本人には、アブラハムのように時代を遡らなければならない「差」はありません。しかし地理的な距離があり、文化の違いがあり、決定的に情報の格差があるのです。日本人も、召し出される前のアブラハムが多分そうだったように、天地創造の神についてさえも知らない状態にいます。アブラハムは神に近づいていただいて、少しずつ神について知ることができるようになりました。

まだ選民になっていなかったアブラハムも、メルキデゼクのように、あるいはヨブがそうであったかもしれないと言われているように、始めからかなりの正しい神意識を持っていた可能性もないとは言えません。ただしアブラハムの行動の中には、むしろ当時の周囲の人々と同じような信仰の形態、天地の造り主である神を信じる信仰にはふさわしくない、信仰の姿を見ることが出来ますので、やはり、正しい神についての知識はあまりなかった

と考えるのが妥当でしょう。

　アブラハムは自分から学んで正しい神について知ったのではなく、正しい神がご自分を啓示してくださったお陰で、徐々に、正しい神についての知識を持つようになり、正しい信仰へと導かれたのだと見るべきです。現代の日本人も、少しずつ正しい神の知識を得ることができるように配慮され、少しずつ正しい信仰が芽生えるように、導かれるべきだと思います。その上で、アブラハムが主イエスについての知識を持たないまま、神を信頼する信仰のゆえに救われたように、日本人も主イエスを知らないまま、主イエスの十字架のみ業の功績によって、救われることがあってよいはずです。

　もちろん、主イエスに対する正しい知識をもって救われるのは、素晴らしいことです。しかし、私たちの救いは知識によりません。信頼によるのです。現在生きている日本人クリスチャンの大多数も、主イエスとそのみ業を正しく理解し、その誤りない知識の上に信仰を持ったのではありません。むしろ何も知らないまま、何も分からないまま、主イエスを信じたのか「神」を信じたのかさえも、明確に言えない様な信仰のまま、救われているのです。

　私たち日本人も、たとえ主イエスを知らなくても、天地創造の神を信頼する信仰によって救われるし、救われているのです。キリストの贖いのみ業は、神がご存知であり、その十字架の功績は私たちが着るのではなく、神が私たちに着せてくださるのです。それなのに、私たちはどうして始めから、主イエスの話を持ち出し、十字架の物語を引っ張り出し、復活について語り、罪を指摘してそれを責め、罪の自覚を生じさせ、悔い改めを迫らなければならないのでしょう。それは私たちが、西欧神学を鵜呑みにしているからです。

　主イエスを信じるように話そうとすると、どうしても、西欧神学の一連の理屈を並び立てなければならなくなります。その中で語る私たち日本人も、聞く日本人たちも、文化的、精神的、概念的、知的躓きを、幾度も乗り越えなければならないのです。それで、伝道がとても難しくなり、語る意欲が萎え、聞く忍耐が擦り切れてしまいます。

　主イエスの贖いのみ業は、天地創造の神についてのある程度の知識と、ある程度の信仰を持ち合わせている人々、律法を持ち、救いを待ち望んでいた人々に対しては、大いに意義のある話、素晴らしい福音です。でも、天地創造の神を知らない人々にとっては、良くて「しち面倒くさい話」、やたらに理屈っぽい宗教談話に過ぎません。天地創造の神の理解なしに、罪の意識を持たせようとしても、枝葉末節の罪に触れるのがやっとで、つまり、嘘をついただの、親に逆らっただの、泥棒をしたのだの、人を傷つけただのということに触れることが出来るだけで、神をないがしろにし、神のみ心に反した生き方をするという、

罪の本質、罪そのものに触れることは出来ません。だから、本当の意味での悔い改めも出来ません。

聖書に出てくる伝道の話は、ほとんどが、天地創造の神についてある程度知っている人々に対するもので、完全な異邦人に対するものは、アテネでのパウロの説教の例だけです。西欧のクリスチャンたちの伝道に関しての学びも、天地創造の神についてある程度の知識を持っている人々を前提としています。カトリックの世界宣教にしても、プロテスタントの近代宣教にしても、天地創造の神を知らない人々に対するものが大部分でしたが、残念ながら、自分たちの先入観を押し付けるだけで、本当に神を知らない人々に対する伝道が、真剣に考えられたことは少なかったのです。

それは宣教というものが、より発達した文明国から未開の国へ、より強い経済力と軍事力を持った国から弱小国へという形を採り、多くの場合、植民地政策と表裏一体で行われてきたためだったと思われます。福音が、聞くものの自由意志で理解され、受け入れられるものとして提供されたのではなく、力ずくで押し付けられたため、聞くものへの配慮がされていないのです。極端な言い方をすると、剣かカトリック信仰か、鉄砲玉か聖書かで、キリスト教は入ってきたのです。

ところが、信長や秀吉や家康の時代、あるいは明治の開国時代や戦後の敗北感の中にあった時代ならばいざ知らず、現在の日本で、先進国から後進国へという感覚や、経済的にも軍事的にも強い国から弱小国に対する押し付けの感覚で、福音を語り聞かせることはまったく不可能です。このような状況では、西欧人が理解している、「主イエスを信じさせる伝道」では、効果は望めないのです。西欧神学が力を入れている、キリストの贖罪論を中心にした神学では、日本人に伝道することは困難なのです。

さらに言えば、アブラハムは罪の悔い改めさえしないまま、信仰によって救われています。罪の悔い改めさえ不要だったのです。プロテスタント神学において、罪の悔い改めは救いの絶対条件のように言われています。信仰によって救われるという信仰には、罪の悔い改めが含まれているかのように教えられています。でも、アブラハムは、救われるために罪の悔い改めもしていないのです。少なくても聖書は、それを明らかにしていないのです。

確かに使徒たちは、異邦人に対しても罪の悔い改めを教えたと思われます。主イエスとその甦りを語っていたのと同じです。ペテロのペンテコステの日の説教や、コルネリオとその家族に対する説教などから、それを推察することが出来ます。ただし筆者は、パウロがアテネで行った説教の中にある「悔い改め」（使徒 17 : 30）の意味は、同じギリシヤ語が

用いられていても、ユダヤ人的な悔い改めの意味を強く持つものではなく、もともとのギリシヤ語が意味する、「考え方を変える」という意味ではないかと以前から指摘してきました。ユダヤ人的な意味は、まだ一般のギリシヤ人には、行き渡っていなかったと考えるからです。

救われるために、罪の悔い改めが絶対必要条件ではないとすれば、救いを得させるために、キリストの十字架を語らなくても良いという、選択肢もあるはずです。罪については知らない、だから悔い改めも知らない、キリストについても知らない、十字架についても知らない、でも、天と地をお造りにになった神に信頼し、その信頼のゆえに救いを体験してから、神の愛を深く知り、神が準備されたキリストによる救いを学び、十字架に感謝し、イエスを主として礼拝することが出来るはずです。そうすると、日本人への伝道の手順、やり方が変わります。

本当の罪の悔い改めは、罪の正しい理解と自覚がなければあり得ません。罪の正しい理解は、絶対に聖い神の存在を前提にしなければあり得ません。ですから、日本人クリスチャンの本当の意味での悔い改めは、クリスチャンになってしばらく経ち、絶対の神の絶対の聖さについて知り、その前に生きる自分の惨めさを実感するようになって、初めておこなわれるのが普通です。

自分の罪深さ、惨めさを強烈に実感することによって、キリストの謙卑も十字架も、深く大きな感謝をもって受け入れることが出来るようになるのです。自分の罪の自覚を持たないまま十字架の物語を聞いたとしても、せいぜい、どこか遠い国であった感動的な出来事で終わってしまうのです。

Ⅱ．　主イエスを信じないものは地獄へ落ちるのか

旧約時代の救いは、神に対する信頼によるものです。それに加えて、誠実な生き方がその救いの質に影響しました。もちろんこれは旧約聖書では明らかにされておらず、新約聖書の光に照らされてはじめて理解されるものです。新約聖書が教えるような意味での救い、すなわち個々人の救いと永遠のいのちは、旧約聖書の時代にはまだ明瞭にされておらず、だれも理解していませんでした。でも、旧約時代にも新約聖書が教える意味の救いがあったわけです。

また旧約聖書に、個々の異邦人の救いについて、記されるはずもありませんでした。とはいえ、アブラハムの祝福が異邦人にまで及び、異邦人も光を見るという程度は語られて

います。異邦人も救われるのです。その異邦人の救いについて啓示によって学び、語ったのがパウロです。でも、そのパウロでさえも余り触れていないのが、過去現在を通じて、イエスを知るすべが無かった人々の救いは、いったいどうなるかという問題です。

主イエスについてどころか、天地創造の神についてさえ知る機会がなかった人たちは、どうなるのでしょう。人は、たとえ主イエスについてはまだ知らなくても、天地創造の神について、「わたしはある」と仰せられた神について知れば、アブラハムのように神に義とされることが可能です。ところが、その天地創造の神さえ知らなくては、その神に信頼することさえできないのです。神を信じて救われたアブラハムの例に倣うことも出来ないのです。だからこそ私たちは、天地創造の神が私たちを愛しておられるという、福音を語らなければなりません。

パウロは、「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができない」と言い、「律法なしに罪を犯したものはすべて、律法なしに滅びる」と教えています。ですから、たとえ神を信じる機会を与えられなかった人々も、滅びるのです。異邦人として律法を与えられていない日本人も、滅びるのです。ユダヤ教を背景にした新約聖書の、一般的な言い方をすれば、主イエスを信じない者はすべて滅びるのです。

とは言え、キリストを信じない者は地獄に行くという教えは、少なくても聖書の教えによって、断言できるものではありません。「滅びる」ということと「地獄に行く」ということの間には、大きな隔たりがあります。

Ⅱ．A．　地獄について

「地獄」について言うならば、そこにはまず翻訳の問題があります。日本語の聖書の多くも「地獄」と翻訳していますが、この言葉は、もともとヘブル語でゲンヒンノム、あるいはギリシヤ語でゲヘナと呼ばれていた、エルサレムの南側に位置した谷間のことでした。ここがエルサレムのゴミ捨て場として使われていて、いつも不潔に蛆虫がわき、焼却のための火が燻っていたために、キリストはそれを、悔い改めない罪人に加えられる刑罰の象徴として、お用いになったのです。それを「地獄」と翻訳してしまうと、仏教的な地獄の理解を持ち込んでしまう危険がありあますが、新改訳聖書のように「ゲヘナ」のままに残しておいたのでは、意味が通じないという難しさがあります。

キリストがこの言葉をお用いになったのは、ご自分の目の前にいるユダヤ人たちに対してでした。彼らは律法を持ち、預言者に導かれ、キリストのお言葉を聴き、神の救いの計

画も教えられ、しるしとしてのキリストのみ業も見ていながら、キリストのお言葉に耳を貸さず、かえって激しく敵対していたユダヤ人たちに対する、厳しい警告として語られたのです。キリストの教えどころか律法も与えられておらず、天地創造の神についてさえも聞いたことがない人々ではありません。つまり、日本人に対して語られたものではないということです。

キリストのたとえ話の中に、「金持ちと乞食のラザロ」と呼ばれているものがあります。（ルカ 16：19－31）キリストは、弱い者や貧しいものに心を閉ざして贅沢な暮らしをしていた金持ちが、死後に落ち込む火の中の苦しみを描写しています。ここでキリストがお用いになった言葉は「ハデス」で、当時のユダヤ人たちはこの言葉を、死後に行く地の深いところという意味で、一般的に用いていたものです。このお話もまた、語られた対象はユダヤ人であり、キリストもはっきりと、ユダヤ人であることを意識して語っておられます。（この物語は譬えではなく事実だという説もありますが、ユダヤ人向けの話であることには変わりありません）

Ⅱ．Ｂ．　黙示録の解釈

キリストがお語りになった「刑罰の象徴としてのゲヘナ」と、同じものとして理解されがちなのが、黙示録二十章七節から十二節に記されている、悪魔とその手下どもと、いのちの書に名前を記されていないすべての人々が投げ込まれる、「永遠に昼も夜も苦しまなければならない」「火と硫黄との池」です。ゲヘナの火が消えないというキリストの表現と、永遠の火という黙示録に記された表現が類似し、罪人たちが最終的に投げ込まれる刑罰の場であると考えられるからです。ただし、キリストがお語りになったゲヘナと、黙示録の火と硫黄の池を同じものと考えるだけの、確実な根拠があるわけではありません。

むしろ、ゲヘナはハデスの類似語と考えるほうに、分がありそうです。ハデスは、旧約聖書では人が死後にいく場所と考えられていた、シオールのギリシヤ語訳で、日本語の黄泉の国、あるいは陰府の国に近い感覚です。事実、口語訳聖書は黄泉と訳していますし、共同訳は陰府と訳しています。黙示録の二十章十三と十四節によると、ハデスそのものが最終的に火と硫黄の池に投げ込まれていますので、ハデスは、死後、人が最後の審判を待つまで留まるべき一時的な場所、次元、あるいは状態と考えることもできます。ゲヘナも罪人の一時的な刑罰の場所として描かれているように読み取れますので、ハデスと同じものと見ることも可能です。あるいはゲヘナはハデスの一部分、悔い改めていない罪人だけが行く部分と理解し、義とされた人は、同じハデスでも、「アブラハムの懐」とキリストが表現したところ、あるいは「パラダイスと表現」した次元に行くと理解したほうがよいか

もしれません。

「かもしれません」などと、不確実なことを言うのは、この問題について聖書は余り明確には教えておらず、断定すべきではないと考えるからです。キリストの象徴的な表現や譬え話、あるいは黙示文学の表現から、確実な事実を引き出すのは困難です。無理にそれをやると、手前味噌の解釈に陥りますので、断定しないで可能性を指摘するだけにとどめて置くのがよいと思います。キリストはあくまでも一つの修辞法としてゲヘナを持ち出し、「蛆虫」という不潔さと、「いつまでも燃え続ける火」という恐ろしさを、刑罰の象徴として際立たせ、悔い改めへの強い勧めと警告とされたのです。その刑罰の正確な描写や説明をしたものではありません。またハデスとの関係を明らかにしているわけではありませんし、火と硫黄の池との関わりについても語っておられないのです。

この問題を考えるとき、黙示録という書物の性格に注意することが大切です。黙示録は、もともと黙示文学、すなわち、何らかの目的のためにあえて物事を明瞭に語らず、修辞法をたくさん用いて、分かる人には分かるように隠して語ったものです。その読み方については幾つかの異なった立場があり、どれを取るかによって解釈もずいぶん変わります。筆者は基本的に、当時の政治情勢や社会情勢の中で、クリスチャンたちがどのような信仰を持って生きるべきかを記したのが黙示録で、その中に、未来に対する予言的要素もたくさん含まれているという立に立っています。その予言的要素は、クリスチャンに与えられた警告であり、また希望でもあったわけです。自分の神学的立場を擁護するために、その表現を字義通りに解釈し過ぎてはならないし、反対に余りにも象徴的に解釈してもならないのです。そのあたりの匙加減はとても難しいものです。それだけに、断定を避けるのです。

また、黙示録に書かれている言葉や表現は、黙示文学として当然、それ自体では曖昧な理解しかもたらしません。それをできるだけ明らかにするためには、黙示録だけから理解しようとせず、聖書の関連した物事や表現と比較しながら理解しようと努力することが大切です。しかもその場合、自分の学説や読み方に都合よく、聖書の他の箇所の言葉や表現を前後の繋がりから切り離して並び立てるのではなく、それぞれの聖書の箇所を正しく解釈した上で、比較検討するのです。黙示録の言葉は、黙示文学ではない聖書の部分の教えと、比較対照させて理解しなければならないのです。

そういうことを理解して黙示録二十章の七節から十五節を読むと、この箇所が極めて独特な内容であることに気づきます。これと比較検討できる聖書の教えは他にないのです。安易なのが、キリストがお話になったゲヘナの裁きと同一視することですが、ゲヘナはむしろハデスの一部と考えられますので、永遠の苦しみを与える火と硫黄の池とは別のものです。火と硫黄の池は、ハデスもゲヘナも飲み込んでしまうものです。

この箇所の表現だけを読むと、いのちの書に名が記されていない者すべては、この火と硫黄の池に投げ込まれ、永遠に苦しみ続けると理解されます。そしていのちの書に名が記されている者とは、普通教えられているように、主イエスを信じた者であると考えると、主イエスを信じていない者はすべて、この永遠の刑罰に入れられることになります。そしてその永遠の刑罰こそ、地獄だというのが、福音派の教会の普通の考え方なのです。でも、地獄イコール火と硫黄の池という、聖書の教えはありません。

（いのちの書、あるいはそれに類似表現は、旧約の時代から用いられて来たものですが、当時、厳密な意味で何を指していたのか明らかではありません。それが、神様の記録であり、それに名が記されることは、素晴らしい祝福であったと理解されてはいたでしょう。ただ、死後の世界、死後における神様の取り計らいについて、旧約の時代にはまだ非常におぼろげにしか啓示されていなかったために、だれも明確な理解を持っていませんでした。それが少し明らかになったのは、キリストが永遠の命について、あるいは甦りについて、さらにはゲヘナの火の裁きについてなど、新たな教えを与えてくださってからのことです。ただ、キリストの教えやヨハネの黙示録などを比較検討しても、そのいのちの書が果たして文字通りの書物なのか比喩的表現なのかさえも、確実なことはいえないほど不明瞭なのです。それでも、このいのちの書に名前を記されるということは、永遠の命が与えられることに違いないと、判断できるわけです）

さらに、ある主題について語っている聖書の箇所が一箇所しかない場合、つまり、そこでしか語られていない場合、そこに教えられていることだけから、断定的に神学を築いてはならないというのが、聖書の解釈の原則です。聖書を独りよがりな勝手な解釈に用いさせないための、安全弁です。また、たとえ二箇所あったとしても、それだけで断定的に語るには不充分なのです。いわゆる「最後の審判」といわれるこの部分の内容は、ここ一箇所だけに記されていることです。

類似したものとしては、マタイの十三章三十六節から四十三節で語られている毒麦の譬えや、二十五章三十一節から四十六節に記された、右と左に分けられる裁きの話があります。ただ、これらがはたして同じことについて語られているのかどうか不確実であり、またどれほど正確に語られているのかも不明です。人間にはいちど死ぬことと、死後、裁きにあうことが定められていることは明らかですが、その詳細については明らかにされていないのです。

また黙示録のこの箇所の表現では、あたかも、異邦人も含めて主イエスを信じないすべての人が、一様に火と硫黄の池に投げ込まれるかのように読めます。いのちの書に名前が

記されていない人はみな、火と硫黄の池に投げ込まれると語られているからです。ただ既に述べたように、この「いのちの書」とはいったい何なのかとなると、これも正確に語ることが出来るほど、聖書は言及していないのです。このいのちの書は、ユダヤ人やクリスチャン対象にした書物なのか、福音に接する機会も与えられなかった異邦人をも対象とした書物なのか、確実なことは言えないのです。つまり、いま筆者が問題として論じている点については、まったく不確定なのです。ですから、これをもって警告としまた励ましとすることは良いのですが、主イエスを信じていない人は命の書に名が記されていない人であり、それらの人々はみな地獄に落ちると断定するのは、かなり行き過ぎだということになります。

それはまた、聖書の他の箇所で教えられている、より明確な教えと調和しません。パウロは、「律法なしに罪を犯した者はすべて、律法なしに滅びる」という原則を教え、その説明をしていますが、その教えの主旨と合わないのです。（ローマ 2：6 - 16） すべての人は、おのおのその行いに応じて裁かれると言う、明らかな原則にも反します。一人ひとりが、それぞれの行いに応じて裁かれると言うのは、正義の実践としての公平さによるもので、これがないがしろにされると、神の正義が曲げられてしまうのです。そのようなことはあってはならないし、あり得ないのです。

救われるということは、キリストの贖いのみ業のゆえに、私たちの罪の行いの刑罰を、キリストが肩代わりして負ってくださったために、その刑罰を私たちが負う事はなくなったということです。私たちの裁きと刑罰は、キリストが引き受けてくださったのです。それでもなお、私たちはそれぞれの行いにしたがって、裁かれるのです。永遠の命にも階級や格差があるのかどうかは不明ですが、報酬には明らかな違いがあるからです。

ともかく黙示的な表現をしている黙示録の一箇所だけに記されている教えを持って、最後の審判と言う極めて重い主題について、断定的な神学を築いてはなりません。また、キリストがご自分に敵対するユダヤ人に対する警告としてお語りになった言葉を、無制限に、律法も与えられていない異邦人に適用するのは行き過ぎなのです。

黙示録の記述は、一つの解釈をもって断定せず、まず、黙示録の記述を覚え、そこにある可能な解釈の多様性をも受け入れ、それらを警告として受け止め、また希望として持ち続けることです。

Ⅱ．Ｃ．　滅びと地獄

パウロは、「律法のない者は律法なしに滅びる」と言いました。でも、律法なしに地獄へ行くとは言っていません。滅びと地獄とは重なり合う部分もありますが、別のものです。滅びと言うのは、神から離れてしまった状態で、「死」とも呼ばれることがあります。黙示録の二十章の最後の部分に記された第二の死は、最終的に神から完全に離されて、戻る機会を失った滅びの状態と呼べそうです。

また、現在の私たちの社会は、神から離されてしまった「死」の社会であり、「滅び」の中にいる状態です。罪人の目の前に滅びが迫っているのではなく、すでに滅んでいるのです。いちどこの世に生を受けたものは、いのちの中に生まれてきたのではなく、神からはなれて、神の祝福を失い、神の命を失った、滅びの中に生まれてきたのです。ですから、罪人は死後に裁かれて滅びに陥れられるのではなく、今すでに滅んでいて、今の滅びの状態から救われなければならないのです。ぼやぼやしていると、救われる機会が失われてしまうのです。恵の時、救いの日のうちに救いを得させなければならないのです。

この救いの機会を失うと、キリストがゲヘナとお呼びになった状態に陥り、第二の死を待つことになるようです。ともあれ、死後の世界や今後起こることに関する記述は、断定的な言い方は避けるべきものです。これらは旧約聖書の予言と同じで、時とか順序とか内容においてはかなり不明瞭であり、それが起こってから、ああそうだったのかと思い起こすことが多いのです。それでは役に立たないではないかと言うのは早計です。注意を怠らず、心備えをしておくよう、警鐘としてまた励ましとして与えられているからです。

Ⅲ．　始めから主イエスを信じさせようとしなくても良い伝道

救われるために、主イエスを信じさせなくても良いとなると、私たちの伝道方法が大きく変わります。

Ⅲ．A．　主イエスについて語らない伝道

天地をお造りになった神さえ信じれば救われるのならば、最初から主イエスの話をする必要はありません。日本人に主イエスのお話をするのは、易しいことではありません。日本人らしく、黙って聞いていてくださることも多いのですが、ほとんどは分からないか、反発心を持ちながらの我慢を続けてもらっているのです。

イエス・キリストと呼ばれる人物が、歴史上実在したのかどうか。彼がどんな生涯を送ったのか、どんな教えをしたのか、彼が神の子だったとはどういうことか、なぜ救い主と

呼ばれたのか、なぜ十字架に架かって死ななければならなかったのか、復活したといわれているが、本当なのか。そんなことはあり得るのか。

日本人にとっては実に難しく、理解を超え、理論を跳び、無理やりに受け入れ、納得しなければならない話の満載になってしまいます。それは、東京湾に体調五十センチメートル体重四キログラムの、世界一小さな鯨が棲息しているという話を、あらゆる理屈を並べられて、信じろと強制されるようなものです。日本人にしてみると、キリストは良くてせいぜい外国の偉人です。偉大な宗教家であったかもしれません。奇跡くらいは行ったかもしれません。でもその程度の外国人を、救い主として、しかも唯一の信仰対象として、あらゆる他の神々を否定してまで、信じなければならないのか、日本人である今の自分が、何のいわれがあって、そのように無理強いされなければならないのか分かりません。

一方、主イエスについてではなく、神について話すのならば、もっともっと容易に語ることが出来、躓きも少なく聞いてもらえます。日本人は、主イエスについてはまったく無知で、話が通じないのですが、神についてはいくらかなじみがあります。本能としての宗教的感覚を持っていて、外国のもの、異質なものという先入観を持たずに、神についてお話できるのです。

日本人の曖昧な神の感覚、あるいは間違った神の理解さえ邪魔になりません。かえってそれを通して、正しい神についてお話することが出来ます。架け橋として用いることが出来るのです。本当は、八百万の神々などをまじめに信じている日本人は少なく、心の奥底ではもっと高尚な神を感じているのです。そのことを、優しく指摘してお話してあげることも出来ます。そこから、目に見えない神、人間を超越しておられる神、人間の心に感じられる神、人間と良く似た心を持っておられる神、さらには、天地万物を造られた神、自然の法則を定めそれらを支えておられる神、すべてのものを超越しながら、人間を慈しんでおられる神に話を進めることができます。

人間をご自分の姿に似せて作り、愛の対象として大切にしておられる神、人間の幸せを願い、そのためにあらゆる手を尽くしてくださっている神、美しい地球を棲家として与え、作物を与え、家畜を与え、鳥を与え、魚を与えてくださった神について語ることが出来ます。始めから日本にいてくださり、日本を特別に祝福して下さっている、日本の神であることを説明してあげることが出来ます。この神が日本だけの神ではなく、世界の神であることに、気づかせてあげることが出来ます。

八百万の神々などと、一方では間違ったことを言いながら、心の底では、目で見ることも手で触ることも、口で説明することもできない、大きく気高い神を感じ、感謝を捧げ、

祭りを行い、社を建てて拝んで来ながら、決して偶像を作ったり、それを拝んだりしなかった日本人の賢さにも触れることが出来ます。その賢さのために、神が日本という国を特別に祝福してくださっていることも説明できます。

主イエスについて話し出すと、たちまち日本人を躓かせてしまいそうですが、神について話し出すと、日本人の宗教心を用いて、日本人にも受け入れられるように、眞の神についてお話しすることができるのです。日本人にも、ハランを出立したアブラハムが持っていた程度の神知識を持ってもらい、アブラハムが余り知らないまま神を信頼したように、神を信頼できるようにしてあげれば、それでいいのです。

Ｂ．　罪について語らない伝道

次に、罪についても話す必要がなくなります。だれでも、自分の醜い所を指摘されるのは嫌なものです。キリストの時代のユダヤ人には、まず悔い改めが絶対に必要でした。神の啓示が与えられ、律法が与えられ、導きが与えられ、教えが与えられ、罪を自覚させられ、犠牲をささげ、悔い改めの習慣さえ身に付けさせられた上、救い主に訪れていただき、悔い改めをする段階にきていたのです。それでも、悔い改めを迫ったキリストは嫌われて、十字架に架けられることになりました。

クリスチャンとして、しっかりと罪を自覚し、悔い改めることは絶対に必要なことです。ただそれは、クリスチャン人生の最初になければならないというものではありません。神を信じ、神を礼拝し、神がお喜びになる生活をし、神の恵みと祝福を実感できるようになってから、改めて、この神をないがしろにして来た自分の罪を悟ればよいのです。まず、自分は神の祝福に覆われている、神に愛されていると知ることが先です。

最初から、聞く人を罪人呼ばわりして憤慨させ、感情を傷つけ、怒りを引き起こし、わざわざ敵愾心が膨れあがるようにし向けて、顔も見たくない話も聞きたくないと思わせておいて、福音を理解させようとしても無理なことです。それでは、罪さえ正しく理解できません。罪人であるという自覚も不充分です。正しい意味での悔い改めはできません。罪に敏感だったユダヤ人でさえも、罪人呼ばわりされて怒り狂ったのです。日本人はユダヤ人のような罪の理解も自覚も持っていません。その日本人に罪を理解させるためには、「物凄く」多くの言葉を持って説明しなければなりません。必然的に、憤りと嫌悪を引き起こすのです。

罪に対して怒りを燃やす神、恐ろしい神、どこにでも顔を出して怒鳴り散らす神ではな

く、恵み深く、慈愛に溢れ、豊かな祝福で私たちを覆い、私たちの幸せを心底願っておられる神について、私たちの失敗の後始末、私たちの罪の尻拭いをしてくださる神についてお話をしたいものです。また、悪魔の試みに敗れてしまった、惨めな私たちについて最初に語り出すのではなく、神の美しい性質、正しい性質、愛の性質を移し与えられた私たちについて、まず語り始めましょう。

「神様がそのように人間の幸せを願っておられ、人間もまた幸せを追い求めているのに、どうして、この世の中には不孝が満ち溢れているのでしょう」と、問いただされたとき、初めて人間の罪を語り、人間の罪が聖い神の祝福を妨げていることを、教えてあげればよいのです。そうすれば、そこから神が人間を祝福するために、今の不孝な状態から救い出すために、どのようなことをしてくださったかを話してあげることも出来ます。主イエスの贖いの死も、あまり無理なく説明できるようになります。神様の恵みと愛を知ってからのほうが、罪についてよく理解することが出来、キリストの十字架も受け入れることが出来るのです。

Ⅲ．Ｃ．　十字架について語らない伝道

十字架は感動的です。神の愛の凝縮です。でも、それを正しく理解するのは、自分の罪について深い悲しみを持つ者だけです。ですから、日本人に十字架の意義を理解してもらうのは至難の業です。あるいは、理屈としては理解してもらえるかもしれません。ただそれはあくまでも理屈であって、心が伴いません。またその理屈も、日本人の「曖昧な感覚」からは違和感を覚えるものです。

日本人は、厳しく罰することを嫌います。白黒を付けることもよしとせず、できるだけ決着を避けて妥協を図るのです。日本の裁判では、和解を勧められることが多いのはそのためです。ところがキリストの十字架は、徹底的に、正義と罪の世界です。至高の聖さと決定的な罪の汚れの話です。十字架の話は、神の絶対的な聖さの問題なのです。絶対に聖い神は少しも妥協を許さず、人間の刑罰を求めます。日本人が作りだす神ならば、十字架まで持っていかず、どこかで妥協を図り、「高度な政治的解決」をしてしまいます。ところが聖書の神は、そのような低い次元での妥協をよしとせず、断じて、キリストの身代わりの死をお求めになったのです。

このようなキリストの十字架の話は、日本人にはなかなか理解できないものです。せいぜい「神の自己満足」という低次元の問題のために、十字架が要求されたという程度の理解に終わります。超絶した絶対者と言う感覚が薄いためです。私たちにとって十字架の話

は、福音の頂点で、まさに感動的です。ところが、神について、律法について、罪について、犠牲のささげ物については無知な日本人にとって、大抵は躓きとなり、またネガティブな反応を引き起こしてしまうのです。罪人の死を求める神の聖さが、キリストの身代わりという神の愛の犠牲によって、納得させられる筋書きが分かりません。

日本人には十字架の神よりも、悪い人にも良い人にも太陽を昇らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせて下さる、おおらかで、太っ腹な神の話のほうが、合っているのです。まずそのような神をしっかりと信じることが出来るように、語り伝えることが肝要です。

もしも私たちが十字架の神から話を始めずに、まず、とことんまで人間の幸せを願い、そのためにはあらゆる努力をしてくださる神について語り、納得させることが出来ていたならば、十字架の物語も、恐ろしい神の聖さの現れとしてではなく、愛の神の最高の表現として語ることが出来ます。人間に対して貫かれる神の愛の最後の手段として語ることが出来るのです。徹底した正義の刑罰としての十字架ではなく、神の最後の妥協、人間を救うための最高の妥協として語ることが出来るのです。神はご自分の至高の聖ささえ、人間に対する慈しみのゆえに「犠牲に」されて、キリストの肩代わりの死を受け入れるという妥協案を作り、それを実行してくださったのです。それで、神の聖さを納得させてくださったのです。天地創造の神は、日本人が大好きな妥協の神です。ただ、安易な妥協ではなく、最後の最後の妥協なのです。

聖書の神は絶対の神でありながら、人間の弱さに付き合って、そこここで相対的な対応をしてくださっています。多くのクリスチャンが見落としていますが絶対に正しいとか、絶対に悪だというような感覚は、日本人のものではありません。日本人は相対的世界に生きているのです。私たちは、絶対の神の絶対の聖さの中、完全な潔（いさぎよ）さの中にも、神の妥協の姿を見出すことが出来るのです。

おわりに

「主イエスを信じる者は救われる、信じないものは滅びる」というのは正しい表現です。しかし、「主イエスを信じる者は天国へ、信じないものは地獄へ」というのは、聖書の教えを正しく言い表していませんし、日本人の感覚に合わない表現です。

もう五十年近くも昔のことで、記憶も定かではないのですが、C・H・スポルジョンという希代な説教家の言った言葉を読んだことがあります。たしか、「罪について語るときは、

聞いている人たちが恐ろしさに震え上がるように、地獄の火の凄まじさについて語れ」というようなことでした。なるほどと感心したものです。それで、そのことについて色々喋っていると、同室の神学生の一人が、「僕は、罪人の心が溶けてしまいそうになるほどに、神の愛を語りたい」と言ったものです。

その神学生が、果たしてどれだけ物事の本質を理解して言ったことなのか、良くはわかりませんが、今になって思います。彼は正しかったのだと。

今年、面白い出来事が伝えられました。４０年ほども前、タイの南部の小さな村で生活していた３０代の女性が、隣村のお祭りか何かに行って、甥や姪にも会ってみようと汽車に乗ったのですが、うっかり乗り越してしまいました。あわてて戻ろうとしたのですが、こんどは間違った行き先の列車に乗ってしまい、さらに間違いを何回も繰り返して、とんでもなく遠い北部の小さな町に着いてしまいました。見知らぬ町で会う人たちに道を尋ねたのですが、誰一人、彼女の言うことを理解できませんでした。まったく違う言葉を話す部族の中に迷い込んでいたのです。

とうとう彼女は言葉も分からないまま、物乞いをして生活をしなければならなくなりました。長い間大変な苦労を重ねた末、ついに生きていくのも困難になって、町の福祉課の施設に収容されることになり、やっと、少し人間らしい生活が出来るようになりましたが、寂しさと悲しさは募るばかりでした。

そんな時、彼女が収容されていた施設を会場にして開かれた、福祉関係の会議に出席した若い女性たちのおしゃべりに、聞き耳を立てました。なんと、間違いなく、昔、彼女が故郷で話していた言葉です！ 四十年ぶりに聞く自分の故郷の言葉でした。

会議に出席していた若い女の子たちの活躍で、この女性はとうとう自分の親族たちと感激と涙の会見をしました。本当に幸いなことに、彼女は親族たちに連れられて、故郷に帰ることが出来たのです。大歓迎を受けて、幸せな日々を送ることになりました。

彼女は、迎えに来た親族たちの顔を見分けることさえ困難でしたが、親族たちをまったく信頼したのです。親族たちが自分の名を呼び、自分の家族たちの名前を挙げて、彼らが今どのようにしているか話しただけで、すべてを信じ、すべてを任せて故郷に帰ったのです。

彼女が行方不明になってから、家族がどれほど大騒ぎをして捜索したか、警察にも、ラジオにも、新聞にもお願いし、どれだけ大きなお金を費やして探したことか。隣の県にも

その隣の県にも、バンコクまで出かけて捜索願を出したことも、占い師やまじない師にも幾度も出かけて伺いを立て、何年も何年も探し続けたことも、何から何までいろいろ聞く前から、彼女は親族の言うことを信じ、つれて帰るという彼らについて行ったのです。

彼女のために、家族や親族がどれほど探し回り、苦労をしたかなど、彼女は聞く必要がなかったのです。そんなことは後回しでよかったのです。彼女に必要だったのは、迎えに来た親族をただ信じて、ついて行くことでした。

私たち、神から迷い出てしまった罪人に必要なことは、神がどれほど大きな犠牲を払って私たちを救い出そうとしてくださったか、そのために、独り子キリストを遣わし、十字架で殺してくださり、甦えらせて下さったかなどと言うことを、正しく理解することではありません。まずそれらを知り、感謝をすることでもありません。救ってくださるという神を信頼するだけで良いのです。

神の救いを語る私たちがまずしなければならないことは、キリストの話でも十字架の話でも、罪の話でも悔い改めの話でもありません。救って下さろうとしている神の愛、神の熱意、そして救われることの素晴らしさを語り、信頼するように励ましてあげることです。日本人として、心の奥深くで直感的に感じていた、大きく気高く、清らかで尊いお方こそ、実は天と地と私たちを造ってくださった方であることを、伝えてあげることです。神がお造りくださった自然を楽しみ、神が与えてくださる四季を喜び、穀物と果物と魚と家畜を感謝しながら、生きることが、人間の本分、人間らしい生き方であることを教えてあげることです。

自分が神の大きな愛と恵みの中に生きていることに、まず気づかせ、実感させてあげることです。そうしてこそ、神のみ前に自分は罪人に過ぎないことが理解できるのです。私たちが救われるのは、神が私たちの救いのために何をしてくださったかを、理解することによってではなく、神が私たちを救おうとしてくださるからです。その救おうとしてくださる神を信頼させれば、それでいいのです。